

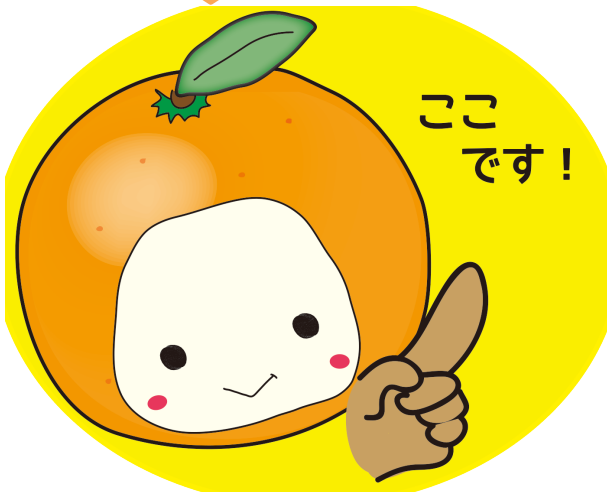
百字要約①

みかんせい 知創

短い物語の要約学習だ。

物語を読んで、

- ①オチ(結末)を読み取る
 - ②内容を絵と主述の文で表す
 - ③100字で要約する
- の順番で理解し、読解力を高めよう



その湖は北の国にあった。広さはそれほどでもないが、たいへん深かった。しかし、今は冬で、厚く氷がはっていた。

S氏は休日を楽しむため、ここへやってきた。そして湖の氷に小さな丸い穴をあけた。そこから糸をたらし、魚を釣ろうというのだ。だが、なかなか魚がかからない。「面白くないな、なんでもいいからひつかかってくれ」

こうつぶやいて、どんどん釣糸をおろしていると、なにか手ごたえがあった。

「しかし、魚では、ないようだ。なんだろう」

引っ張り上げてみると、古いツボのようなものが、針にひっかかっていた。

「こんなものではないが、捨てるのもしやくだが、古道具屋へ持っていかけてみる。高くは買ってくれないだろう。ひとつ、なかを調べてみるか」

なにげなくフタを取ると、黒っぽい煙が立ちのぼった。あわてて目を閉じ、やがて少しずつ目をあけると、ツボのそばに、みなれぬ相手が立っている、色の黒い小さな男で、耳がとがっていて、しつぽがあった。

「いったい、なにものだ」

S氏がふしぎそうに聞くと、相手は、ニヤニヤ笑ったような声で答えた。

「わたしは悪魔」

「なるほど、本の絵にある悪魔も、そんな格好をしていたようだ。しかし、本当にいるとは思わなかった」

「信じたくない人は、信じないでいればいい。だが、わたしはちゃんとここにいます」

S氏は何度も目をこすり、気持ちを落ち着け、おそろおそろ質問した。

「なんで、こんな所に現れたのです」

「そのつぼに入り、湖の底で眠っていたのだ。そこをひっぱりあげられ、おまえに起こされたと言うわけだ。さて、久しぶりに、なにかするとしようか」

「どんなことができるのです」

「なんでもできる。なにをやってみせようか」

S氏はしばらく考え、こう申し出した。

「いかがでしょう。わたしに、お金をお与えくださいませんか」

「なんだ。そんなことか。わけはない。ほら」

悪魔は氷の穴にちよつと手をつっこんだかと思うと、一枚の金貨をさし出した。

あつけないほど、簡単だった。首をかしげながら、S氏が手にとってみると、本物の金貨にまちがいない。

「ありがとうございます。すばらしいお力です。もつといただけませんか」

「いいとも」

こんどは、ひとにぎりの金貨だった。

「ついでですから、もう少し」

「よくばりなやつだ」

「なんといわれても、こんな機会をのがせるものではありません。お願いです」

S氏は何回もねだり、悪魔はそのたびに金貨を出してくれた。そのうち、つみあげられた金貨の光で、あたりはまぶしいほどになった。

「まあ、これくらいでやめたらどうだ」

と悪魔はいつたが、S氏は熱心にたのんだ。こんなうまい話には、二度とお目にかかれないうと考えると考えたからだ。

「そうおっしゃらずに、もう少し。こんど一回でけっこうです。お願い。ですから、あと一回だけ」

悪魔はうなずき、また金貨をつかみ出し、そばに置いた。

百字要約

③	①
だれが なにを どうした	だれが どうした
④オチ	
だれが どうした	だれが どうした

絵で表す

絵の主語と述語

その時。ぶきみな音が響きはじめた。金貨の重みで氷にひびがはいりはじめたのだ。そう気づいてS氏は大急ぎで、岸へとかけだした。やっとたどりつき、ほっとしてふりかえってみると、氷は大きな音を立てて割れ、金貨もツボも、かん高い笑い声を立てている悪魔も、みな湖のそこへと消えていった。

この物語のオチ（結果）はどんな内容ですか

ケイ氏の家にやってきた友人が言った。

「あなたは、薬をいじるのが好きですね。いつきても、薬をませ合わせたり熱したりしている。なにか、いいことがあるのですか」

「喜んで下さい。やっと、すごい薬ができました。これですよ」と、ケイ氏は粉の入ったビンを指さした。友人は、それを見ながら聞いた。

「それはけっこうでした。で、なんの薬ですか」

「カゼの薬です」

「今までのに比べ、どんな点が優れているというのですか」

「今、効き目をごらんにいれましょう」

「効き目を見せるといつても、あなたはカゼをひいていませんか」

「いいから、見ていてごらん下さい」

「まあなく、ケイ氏はセキをはじめた。友人は心配そうに、ケイ氏のひたいに手をあてた。

「熱がある。これはどうしたことですか」

「さわぐことはありません。これはカゼを治す薬ではなく、カゼひきになる薬なのです」

「ばかばかしい。あきれました。わたしにカゼをうつさないよう、願いますよ」

「一時間ほどたつと、ケイ氏のセキはおさまり、熱も下がった。友人はますます変な顔をした。

「もうなおったのですか」

「つまりですね。この薬を飲むと、カゼをひいたのと同じ外見になるのです。外見だけで、本人は苦しくもなく、害もありません。そして、一時間たつと、もとに戻るのです」

「妙なものを、こしらえましたね。しかし、こんな薬が何かの役に立つのですか」

「もちろんです。ずる休みに使えます。すなわち、いやな仕事をしなくてすむというわけでしょう」

「なるほど、なるほど。それは便利だ。やりたくない仕事を押しつけられそうになったときは、この薬を飲めばいいのですね。すばらしい。ぜひ、わたしにわけて下さい」

「そら、ごらん下さい。ほしくなつたでyそう。いいですとも、少しあげましょう」

「小さなビンに入れてもらい、友人は喜んで帰っていった。

そして、ある日。今度はケイ氏が友人の家を訪れた。誕生日のお祝いをしたいから、ぜひ来てくれと、誘われたのだ。

その食事の途中、ケイ氏は不意に顔をしかめて言った。

「急に腹が痛みました。悪いけれど、これで失礼します」

友人はあわてたが、気がついたように言った。

「からかわないで下さい。わたしの家にいるのが面白くないので、早く帰りたいというのでしよう。ゆっくりして行って下さいよ」

「いや、本当に痛むのだ」

ケイ氏の顔は青ざめ、汗を流し、ぐったりとした。しかし、友人は信用せず、笑いながらひきとめた。

「この間のカゼ薬以上によくできています。いつもカゼでは怪しまれますから、たまには腹痛にもならないといけませんね」

しかし、一時間たつてもケイ氏は元気にならず、苦しみ方はひどくなるばかりだ。友人はやっと、これは本物の病気かもしれないと考えて、医者呼んだ。かけつけてきた

た医者は、ケイ氏の手当てをしてから言った。

百字要約

「まにあってよかった。もう少しおくれたら、手遅れになるところでしたよ。しかし、なぜもっと早く連絡してくれなかったのですか」
 このことがあってから、ケイ氏は変な薬を作るのをやめてしまった。
 この物語のオチ（結果）はどんな内容ですか

③		①	
だれが なにを どうした	だれが なにを どうした	だれが なにを どうした	だれが なにを どうした
④オチ		②	
だれが なにを どうした	だれが なにを どうした	だれが なにを どうした	だれが なにを どうした

絵で表す
絵の主語と述語

元日の夜。エヌ氏がうつらうつらしていると、だれかが訪れてくる気配がした。

「どなたですか」

と身をおこすと、大黒さまだった。どことなく神々しく、実に福々しい顔をしている。また、肩には大きな袋をしょっている。しかし、念のために聞いてみることにした。

「もしかしたら、大黒さまではございませんか」

「そうだ。お前に福を授けに来たのだ」

本物に間違いないようだ。エヌ氏は大声をあげた。

「ほんとですか」

「もちろんだ。わたしの力で幸福になったものは、数えきれない」

「しめた。ばんざい。では、すぐに……」

エヌ氏は飛びあがり、手を出した。その様子を見ながら、大黒は言った。

「どうやら、お前はあわて者の性格のようだな。それを取り除けば……」

「これがあわてずにいられますか。さて、なにをいただくとするか。このチャンスを逃さずに……」

頭の中で、エヌ氏は巨額な数字を並べはじめた。

「お前は欲張りなところがあるな。それを取り除けば……」

「なんとわれようが、かまうものですか。そうだ。その袋の中のものをみんな下さい」

エヌ氏は目を輝かせて指さした。大黒は困ったような顔をした。

「お前は変なものに目をつける性格があるな。それを取り除けば……」

「さつきから、取り除くことばかり言っている。そんなことは、精神分析医にでも任せておけばいい。さあ、下さい」

「これだけはやれない。どうも、お前には強引で無茶なところがあるぞ」

「それを取り除けばというんでしょう。いらいらしてきた。こうなったら、腕ずくでもちようだいする」

「さて、やめろ」

大黒はさえぎったが、エヌ氏はすばやく飛びつき、奪ってしまった。そして、袋の口を開き、のぞきこんだ。なんともいえぬ、いやな気分がたちのぼってきた。エヌ氏は顔をしかめながら聞いた。

「なんです、これは」

「そもそも福とは、その障害になっているものを取り除けば、簡単に手に入る。すなわち福を与える結果になり、それがわたしの役目だ。ほうぼうで集めてきたのが、袋にいっぱい入っていた。それを開けて吸い込むとは、お前はなんと……」

春の日の午後。あたたかい日差しが、野原いちめんひるがり、そこでは緑の草と色とりどりの花々が、かげろうでまぜられて限りなくゆれを続けていた。銀色に輝く飛行物体がどこからともなく現われて、静かにそこに着陸した。軽い金属的な音をひびかせて開いたドアからは、真紅の服をびったりと身に着けた三人が出てきた。野原で鬼ごっこをしたり、花をつんでいた子供たちは、目ざとくそれを見つけた。

「あっ、あんな人たちが出てきたよ」
「なんだろう。行ってみよう」

子供たちはかけより、あどけない声で呼びかけた。

「ねえ、おじちゃんたち。それに乗ってどこから来たの」

しばらくして、真紅の服の一人が奇妙なアクセントで答えた。

「われわれは空の向こうの、遠い遠い星からきたんだよ」

「なにしにきたの、どこへ行くの」

子供たちは、おそろおそろ服にさわりながら、口々に聞いた。

「べつな星に調査に行く途中なのだが、この星を見かけて、ちよつとおりてみたのだよ。ゆっくりはできないが、標本にする植物を少し集めていこうと思ってね」

それに対し、

「じゃあ、ぼくの集めたお花をあげるよ」

「うん。ぼくたちが手伝ってあげよう」

子供たちは、また野原のかげろうのなかにちらばり、しばらくしてつぎつぎと戻ってきた。

「ほら、こんなに集めてきたよ」

「ぼくはこれだけ」

「ありがとう。おかげで早く仕事がすんだよ。お札になにをあげようか」

と真紅の服の人物は言い、子供たちはひそひそと相談しあった。

「おじちゃんたち、どんなことができるの」

「われわれは文明がここよりずっと進んでいるから、たいいていのはできるだろう。何かして欲しいことでもあるのなら、言ってごらん」

「それならね。大人たちのやり方を、あらためさせてほしいな。大人たちに、ウソをつかせないようにすることなんかもできる……」

「ああ、できないこともないよ」

「ほんと。大人って悪いことばかりしているんだよ。よくわかんないけれど、ワイロなんてことも……」

「わかった。やってあげるよ。だが、われわれに急ぎの仕事がある。帰りには必ず寄って、やってあげるから、待っていておくれ。約束はきつと果たすよ」

「うん。きつと来てね。待っているよ」

さよなら、さよなら、と呼びかわす夕もやのなかを、物体は上昇し飛び去っていった。

「きもちのいい連中でしたね」

そのなかで宇宙人はこう同僚に言った。

「さあ、急ごう。そして、早く約束を果たしてやろう」

飛行物体は目的地を目指し、暗い宇宙の中をでスピードをあげた。

帰路。彼らはふたたび約束の星におりたつた。

「さて、あの連中はどうしたろう。きみたち、さがしてきてくれないか」

と一人が残り、二人は約束の相手たちをさがすために出ていった。そして、戻った。

「おそかったじゃないか」

「だいぶ成長していて、見つけるのに手間取ってしまったね」

「それで見つかったのか、約束の相手たちは」

百字要約

	③		①
どうした	だれが なにを	だれが なにを	だれが なにを
どうした	だれが	どうした	だれが
	④オチ		②
どうした	だれが なにを	だれが なにを	だれが なにを
どうした	だれが	どうした	だれが

絵で表す

絵の主語と述語

「見つけはしましたが、どうも変ですね、この星の連中は」「いったい、どうだったんだ」「すっかり忘れてるのです。そこで、こっちから言いだしてみたのですが、太った腹をなでながら、だれもがこんな返事でしたよ。ああ、そんなこともあったかな、だが、そんな約束はなかったことにして、いまさらよけいなことはしないでくれ、とね」

この物語のオチ（結果）はどんな内容ですか

「今度は、あの星の連中をやっつけて楽しもうぜ」

金属質のうろこで全身をおおわれた生物は、彼らの宇宙船の中で、仲間にこう言った。

「よかろう」

他の連中もうろこを逆立てて、体をくねらせながら、うれしそうに応じた。その指さすところには、月を一つもった緑の惑星がある。

「どうだい、ようすは」

彼らは高性能の望遠鏡をあやつって、その星の上をのぞいてみた。

「やあ、いるぞ、いるぞ。二本足を使って、そろそろ動きまわっているぞ。ところで、今度はどういう方法で、やっつけることにするか」

「そうだな。熱線で焼き払うのはやったことがあるし、このあいだの星では、凶暴ガスを吸わせて、おたがいに殺しあわせる手を使ってしまった。なにかもつと、刺激的なやつつけ方はないものかな」

「ああ、すごいやつでな……」

彼らは攻撃方法を相談しあった。そのうちの一人が小型の宇宙艇に乗って、地上にむかっていった。数時間ほどして戻り、報告がなされた。

「いつてきました。」

「ごくろう。うまくいったか」

「一匹つかまえて、その皮をはいできました」

「そうとう暴れたろう」

「もちろんですよ。ものすごい悲鳴をあげての、抵抗でした。だが、われわれのほうが力は強い。それにしても、この星のやつら、なかなか死にませんね。皮をはいでも、まだ動きまわって……」

「そいつは面白かったろうな。ところで、これからどうする」

「いま、皮を研究班に渡してきました。それを溶かすビールスを作らせています」

「それはいい。やつらの皮膚がビールスにおかされ、どろどろに溶けるのを、われわれはここから見物できるわけだな。早く見たいものだ」

彼らは期待でわくわくしながら、待った。そのうち、研究班が完成を知らせに来る。

「できました」

「よし、さっそくばらまこう」

彼らの宇宙船はその星を一周し、ビールスをまんべんなく、まき散らした。

「さあ、もうすぐ、やつらのうちまわって苦しむところが見られるぞ」

「そら、きいてきた……」

しかし、彼らは不満げな声で話しあった。

「おかしいぞ。やつらにはあわてているが、だれも死なないじゃないか。死なないどころか、なかには、むしろ喜んでいるやつもいるようだ」

「変ですね。なんだか薄気味悪くなってきた。もうやめて、引き上げましょう」

「ああ、別の星にしよう」

彼らのさつてゆく星、地球上では、そのときしかめつらしい顔の学者たちが、だれも彼もが突然はだかになった現象を解決すべく、調査にとりかかりはじめていた。

